

Writing of Japanese Language User in a Plurilingual and Pluricultural Society: The Case of Japanese Brazilians Living in Sao Paulo and Brasilia

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Mukai, Yuki, Matsuda, Makiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00062725

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



論文

複言語・複文化社会における日本語使用者のライティング —サンパウロとブラジリア在住の日系人を例にして—

向井 裕樹・松田 真希子

要旨

本研究は、複言語・複文化社会の中で生活する日系ブラジル人の日本語でのライティング状況について調査・分析したものである。具体的には「書く」ことについての意識、ニーズ、困難点についての検証である。調査対象者は、日本語口頭能力が中級レベル以上の日系ブラジル人18名である。データ収集はアンケート調査とインタビューで、調査は2017年11月、及び12月にかけて行われた。分析の結果、「書く」困難点に関する傾向として、特に、漢字、慣用句、文法に関する項目で、個人間において大きな差が見られた。日々日本語で「書く」ニーズは小さく、日本語関係の仕事をしている人を除き“They-code” (Gumpers 1982) としての「書く」は見られなかった。友達同士との私的な交流、すなわち“We-code”としての「書く」ニーズも少ないが、“We-code”で書きたい願望があることがわかった。また、興味深い現象として“I-code”としての「書く」行動が見られた。

I. はじめに

I. 1 日系ブラジル人の日本語能力をめぐる状況

日系ブラジル人は本人、または血縁者が日本生まれ・日本国籍のブラジル人を指す。現在ブラジルは日系3-4世が中心層で、6世まで生まれているが、まだ多くの場合、親族(祖父母、いとこなど)の誰かに日本語ネイティブがいることが多い。ノンネイティブであっても高度な日本語使用者がかなりの高率で存在している。彼らの日本語口頭能力はこういった日本語使用者の接触の質と量で決まるため、中国やベトナム等のJFL (Japanese as Foreign Language) としての日本語学習者が中心である国とは異なり、日本語学習年数と日本語能力との間に相関が見られにくい。特に家庭内における日常会話についてはその傾向が強いようである。

しかし、読み書き能力(リテラシー)については家庭内で身につけにくいとされており(坂

本2006), 特に文字に漢字を持つ日本語は, 学習機関での学習経験の有無が「書く」能力に大きな影響を与える。また, ブラジルは国全体がリテラシーの低い国で, 人口の44%が本を読んだことがなく, 30%が本を1冊も買ったことがない(Estadão 2018)と言われている。

また, ブラジルは都市部と地方部で日本語能力が異なる傾向にある。都市部, 特にサンパウロは戦前移住者が多く, 日系ブラジル人の使用言語はポルトガル語が中心で, 日本語継承が弱い傾向がある。2世の段階でほとんどが「聞く」能力だけが突出したバイリンガル(レセプティブバイリンガル)である(工藤・森2015)。3世以降の日本語能力は全体的に下がるが, 中でも「書く」能力が最も弱く, 「聞く」「話す」「読む」「書く」の順となっている(工藤・森2015)。つまり, 都市部の日系ブラジル人3世はJFLの日本語学習者に近い傾向を持つ。一方, 地方部の戦後移住地は日本語の維持継承が強く, ブラジリアも都市部の戦後移住地の傾向が見られる。

しかし, 近年は出稼ぎ子弟の日本ーブラジル間の往還により, 日本語使用者のバリエーションも多様化しており, その属性の超多様性(superdiversity)が指摘されている(坂本2016)。そのため, 都市部も地方部も1世>2世>3世の順に日本語力が下がるといった単純な傾向ではなくなっている。

1. 2 本研究の目的

本研究では, このような超多様性を持つ複言語・複文化社会の中で生活する日系ブラジル人による日本語でのライティングに焦点を当てて分析をする。具体的には, 「書く」ことについての意識, ニーズ, またライティングの際にどのようなことに困難を感じて書いているのかを考察する。調査協力者はサンパウロとブラジリア在住の日系ブラジル人である。

日系ブラジル人の「書く」意識とニーズと困難点を探る意義は以下のように考えられる。これまでの日本語教材では, ノンネイティブでゼロから外国語としての日本語を4技能ともにバランスよく学ぶ学習者がプロトタイプとして想定されていた。しかし, 日本語の接触場面が多様化している現在, 学習者を社会的属性に分けることの無意味さがあると思われる。例えば, 留学生ですら彼らの属性, 経験, 学習目的は様々である。それらのことを鑑みると, 個によりそった日本語学習デザインが求められていると言える。また, 近年の出稼ぎ子弟の日本ーブラジル間の往還により, 複言語話者, translanguaging userとしての日本語使用者の増加が予想され, 特に日本国内ではその傾向がますます強くなる可能性がある。つまり, 日系ブラジル人はこのような複言語話者としての日本語使用者の「書く」意識とニーズと困難点を探るための模範的なデータとなりうると思われる。

II. 先行研究

Gumpers (1982) はコミュニティの言語を“*We-codes*”と“*They-codes*”の2つの主要なカテゴリーにグループ化した。Gumpers (1982: 95) の定義では、“*We-code*”は家庭や家族の絆のための言語であり、非公式な活動やグループ内のメンバーとの相互作用に使用する言語であり、“*They-code*”は社会経済の言語で、よりフォーマルで個人的ではないことに関連する言語、個人的なグループ外の関係を表す言語である。具体的には、アメリカにおけるスペイン語コミュニティで使用されるスペイン語は“*We-code*”多数派言語である一方、英語は“*They-code*”言語である (Gumpers 1982: 66)。

外国語として日本語のライティングに関する研究には石毛 (2011, 2012, 2014) がある。石毛 (2011) は、韓国語母語話者と英語母語話者の初級学習者を比べ、前者が母語をより多く使っていると結論付けた。その理由として、韓国語と日本語の語順が近いことを挙げている。また、初級の英語母語話者は文法を意識化しながら書いていることが示された。

石毛 (2012) は、日本語のレベル別に英語母語話者の日本語のライティングの傾向を調査した。初級・中級の学習者はより母語である英語を思考の道具として用いているのに対し、上級の学習者はより日本語で考えながら書いていることが明らかとなった。言語の表記や文法における類似性の有無に関わらず、日本語レベルが低いほうがより母語を用いる傾向があるということも指摘している。

石毛 (2014) は、英語母語話者、韓国語母語話者、及び中国語母語話者が日本語で作文を書く際に、どの程度母語を意識して書いているか調査した。その結果、3者ともに作文過程で母語を多く援用していることが明らかとなったが、母語を用いている比率が3者の間で異なることが示された。石毛 (2011) では韓国語母語話者に母語使用が多く見られたと報告しているが、石毛 (2014) では英語母語話者で多く見られたと指摘している。中級で作文過程の思考の道具として母語を多く用いているのも英語母語話者に限られると報告している。

III. 調査概要

調査協力者は、筆者2名と接触のある日系ブラジル人18名で、全員中級以上の日本語口頭能力を有している。調査協力者の属性は、日系2世が2人、3世が15人、4世が1人で、住居地はサンパウロが11人、ブラジルが7人である。調査対象者の概要を表1に示す。

表1－調査対象者概要

名前(全て仮名)	日系何世	母語(第一言語)	出身地	年齢	日本語学習年数	日本滞在年数
Karolina	2	日本語	ブラジル	38	8	5
Suzana	3	日本語	ブラジル	19	2	12
Mariana	3	ポルトガル語	ブラジル	23	5	0
Larissa	3	ポルトガル語	ブラジル	23	5	0
Luna	4	ポルトガル語	ブラジル	20	5	3.5
Kamila	3	ポルトガル語	ブラジル	22	1	6
Leonardo	3	ポルトガル語	ペロオリゾンテ	30	1	0.1
Fernando	3	日本語	サンパウロ	61	5	0.5
Luciana	3	ポルトガル語	サンパウロ	29	1	0
Viviane	3	ポルトガル語	サンパウロ	32	5	3
Patrícia	3	ポルトガル語	サンパウロ	31	1	0.5
Guilherme	3	ポルトガル語	サンパウロ	29	4	0.1
Tiago	3	ポルトガル語	サンパウロ	29	0	0
Caio	3	ポルトガル語	サンパウロ	37	10	0.5
Gilberto	3	ポルトガル語	サンパウロ	21	0.5	5
Luis	3	ポルトガル語	サンパウロ	31	4.5	1
Ana	3	ポルトガル語	サンパウロ	21	4	0.1
Enzo	2	ポルトガル語	サンパウロ	40	4	1

第一言語(最初に獲得した家庭内言語)に関しては、日本語と回答したのは2世が1人、3世が2人、ポルトガル語と回答したのは2世が1人、3世が13人、4世が1人である。世代別では、10代が1人、20代が9人、30代が6人、40代が1人、それ以外が1人であった。日本語学習年数は、「ほとんどなし」が2人、「数年(1-4年)」が8人、「5年以上」が8人で、日本滞在年数は、「なし」が4人、「短期(1年未満)」が6人、「長期(1年以上)」が8人であった。尚、本稿に出てくる調査協力者の名前は全て仮名である。

本研究では調査を二段階に分けて行った。まず、調査協力者である日系ブラジル人を対象に「書く」ことについての意識、ニーズ、困難点に関するアンケート調査(選択式、自由回答法で合計10項目)、次に日本語で「書く」ことについてインタビューを行い、調査協力者に語ってもらった。各調査は、2017年11月、及び12月に実施した。

IV. アンケート調査の分析結果

IV. 1 相関分析の結果

まず、アンケート調査の調査協力者のプロフィールに関する各項目を2つずつのペアにし、回答の数値の傾向から相関がどの程度あるかKendall's tauの相関分析を行っ

た。分析した結果を以下に述べる。

日本語が「好きかどうか」と「日本滞在年数」については、相関係数 $r=0.10$ 、 $p=0.57$ で、変数間の関係が有意ではなかった。

「日本語学習年数」と「日本語が好きかどうか」についても相関係数 $r=-0.02$ 、 $p=0.90$ であり、変数間の関係が有意ではなかった。

「日本語が好き」と「日本語を書く必要性」については、相関係数 $r=0.422$ 、 $p=0.036$ と変数間の関係が有意であり、中程度の相関が見られた。つまり日本語を書く必要性が高い人ほど日本語を書くことが好きであることを示している。

以上のことから、本調査対象者である日系ブラジル人については「日本語が好き」と「日本語を書く必要性」についてのみ、中程度の相関が見られたということが言える。

IV. 2 「書く」ことについての困難意識について

次に、書く際に具体的にどのようなことに難しさを感じているのか分析した結果を提示する。これは順序尺度によるアンケート調査で、7つのカテゴリーについて7(最も難しいと感じる)から1(最も易しいと感じる)の順に順位をつけてもらった結果である。

表2－日本語で「書く」際に感じている困難点

	語彙	漢字	助詞、動詞や形容詞の活用、受け身、使役などの形態的要素	構文、語順、修飾節などの統語的要素	接続詞	敬語や授受表現などを含む談話文法	慣用句
平均順位	3.72	4.28	3.72	3.35	3.50	5.31	4.19
標準偏差	1.87	2.27	1.49	2.23	1.26	1.62	2.29
最大順位	7	7	6	7	6	7	7
最小順位	1	1	2	1	1	2	1

調査の結果、「敬語や授受表現などを含む談話文法」(スピーチレベルシフト)(5.31) > 「漢字」(4.28) > 「慣用句」(4.19)の順に難しさを感じている傾向がみられた。

属性別に見ると、日本語能力がネイティブに近い日系ブラジル人(例えば、Fernando)は、統語的要素は難しくないが、接続詞、敬語が難しいと感じているようである。これは、日本語母語話者の国語作文における困難点の傾向と類似していると言える。

また、回答の傾向として、特に、漢字、慣用句、文法に関しての項目で、個人間で差が見られた(標準偏差参照)。このあたりは日本で学校教育を受けた経験があり、母語のように日本語を操ることができる日系ブラジル人とJFL日本語学習者と類似した傾向をもつ日系ブラジル人が混在していることが要因と考えられる。

IV. 3 自由記述について

IV. 3.1 日本語で書くことの好みとその理由(5段階評価)

日本語で書くことが好きかどうか5段階で評価をしてもらい、その理由について記述してもらったところ、結果は「好き」「嫌い」の半々に分かれた。また、その際、他の3技能と比べて「書く」ことが好きかどうか、他の言語(ヨーロッパ系の言語)と比べて好きかどうか回答する傾向が見られた。

「書く」ことが嫌いな人の理由として、漢字が難しい、フォーマルな書き言葉がわからない、「話す」ことに比べて「書く」機会が少ない(習熟しにくい)といった回答が見られた。

- (1) 日本語を書く機会は少ない中、フォーマルな日本語を使う場面が主である。書き方にあまり自信がないため、あまり好きではない。(Karolina)
- (2) 漢字で書くのは少し難しいです。書く際には記憶と正確さが必要で、特に正確に書くのが難しい。(Gilberto)
- (3) 漢字は様々なタイプのものであるに加え、色々な意味があるから難しい。(Luciana)

また、「書く」ことが好きな人の理由としては、書かれた日本語がグラフィカルできれい(Leonardo, Luna)、ヨーロッパ系の言語と比べて省スペースでたくさんの情報が送れる(Luis)、「書く」ことによって語彙を覚えることができ、言葉の理解が促進される(Ana)、自然体にかけるのでとても楽である(Suzana)といった傾向が見られた。

IV. 3.2 日本語を書く必要性和その理由(5段階評価)

日々日本語を書く必要があると感じているか5段階で評価してもらい、その理由について記述してもらった。「書く」必要があると回答した人は少なかった(4名)が、「書く」必要がある理由として仕事で日本語を使用していることや日本語の学生であることなど、日本語の使用が職業と関わっていることがわかった。

- (4) 日本語関係の仕事をしているから。(Karolina)
- (5) 時々、仕事(メール対応、翻訳)で必要だから。(Caio)
- (6) 日本語の学生であるので、練習する必要があると感じている。(Luna)

また、「書く」必要がないと感じている人は

- (7) 両親が日本語がわからないから。(Lucina)
- (8) 日本語で話す人が誰もいないから。(Leonardo)
- (9) 話す必要はあっても書く必要はないから。(Viviane)
- (10) 普段ポルトガル語だけで話しているので、日本語で書く必要は感じていないから。(Kamila)

次に、日々何をどのような状況で日本語で書きたいか回答してもらったところ、以下のトピックが挙げられた。

- (11) WhatsAppやE-mailなどで漢字や仮名を使って日本人の友達に書いてみたいで
す。現在は英語で話しています。(Leonardo)
- (12) SNSや手紙など、日本人の友人とコミュニケーションを図りたいです。(Viviane)
- (13) 私の夢は全て日本語で書くことです。日本語を学習した友人とSNSでやりとり
をすることから、自作の小説や詩まで書いてみたいです。(Mariana)
- (14) 日本人と知り合って、ブログで小説を書いてみたいです。また、Facebook,
Instagram, TwitterなどのSNSでより多くの人とコミュニケーションを図りたいで
す。(Ana)
- (15) 日記を日本語で書きたいです。(Kamila)

以上のことをまとめると下記のようなになる。

- (ア) WhatsApp, FacebookなどのSNSで書きたい。
- (イ) 家族や友達に書きたい。
- (ウ) 日本語しか読めない人に何かを伝える必要があるときに書きたい。
- (エ) 小説や詩を書きたい。
- (オ) 日記を書きたい。

本研究の参加者は、日々日本語で書く必要性を感じてはいない一方、SNSなどを通して「We-code」としての日本語で発信したいという気持ちがあることがわかった。また、外部に向けた発信だけではなく、自分の感情の吐露の手段や日記など、自分に向けた「書く」、すなわち「I-code」としての書く」にも興味があることがわかった。

V. インタビューの分析結果

最後にインタビューで「書く」ことについて語ってもらった結果を提示する。

V. 1 Suzanaの例

Suzanaは日系3世の大学生(19歳)である。ブラジルで生まれた後すぐに家族と共に日本に渡り、日本に約12年間滞在した後、ブラジルに戻って来た帰国生である。高等教育言語はポルトガル語であるが、第一言語は日本語である。彼女は大学で履修している「比較文学2」の講義ノートを日本語でとっている。

- (16) 「でも、やっぱり、仏教とかになると、なんか、(中略)日本を意識しちゃって、先生がなんか、なんか言うごとに、あー日本でもこういうのあったなあみたいなになってて、思考がどんどん日本語になっちゃうんですよね。」
- (17) 「歴史とかのファーストコンタクトは日本だったので、日本語に寄っちゃうかなみたいな。」
- (18) 「哲学なのでやっぱり、日本語を、無意識に日本語で書いちゃうんですよね。哲学とかそういうなんか、自分的観点というか。なんか、客観視しすぎない感じで書くと日本語に寄ることが多いかなみたいな。」
- (19) 「自分的に思ったところとかをメモしたいなって思うコマとかは、やっぱり日本語寄りになっちゃうのかなあ、みたいな。(中略)それで、その哲学者さんが説いた、なんか、あの、恋とかについて、それについて、あの、メモとかをした時は、やっぱ日本語だった。」

つまり、Suzanaの場合、日本での子供(小学生、中学生)の頃の学習・文化体験の記憶が何かのきっかけで触発された時、また、授業中自分にとって関心があるテーマが扱われ、自分の主観的な考えが浮かんできてそれをメモしたいと思った時、思考が日本語寄りになり、その結果日本語で書くことが多い。主観的な表現をする際に日本語を選好することについて言及している点が非常に興味深い。

V. 2 Kamilaの例

Kamilaは日系3世の大学生(22歳)である。彼女もSuzana同様に帰国生である。第一言語はポルトガル語で、「書く」ことに関しては普段はほとんどポルトガル語であり、日本語教育実習の時だけ日本語で書く必要があると報告している。

(20) 「(日本語で)文は作れるんですけど、作文になると、なんか、ポルトガル語のやつだけ来るから、パッと頭に。。。」

ただし、必ずしもいつもポルトガル語だけで書いているわけではないようである。

(21) 「あの、Raiva(怒り)、Raivaなると(怒ると)、あの、なんか、日本語で書いちゃうみたいなの(笑)。(中略)うーん、なんか、chateado(うっとうしい)の時に、なんか、怒って、あ、悲しいとか、という気持ちになると、日本語になっちゃうみたいなの(笑)。」

(22) 「あの、思う、思う？感じたことだけを(日本語で)書く。そう、考えないで、あの、ああ、今日嬉しいって言ったら、あの、なんか書いて、あ、怒っているっていう、なんか、その時はなんか、心にギューンと来た時だけね、書く。それ以外はあんまり(日本語で書かない)。」

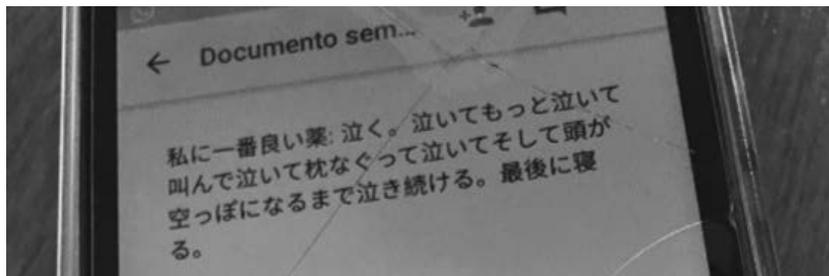


図1－Kamilaの日本語でのメモ

Kamilaは、日本語で書く必要は感じていないと述べて、感情的になると日本語で書きたくなるという。そして、書いたものは他人には見せないという。つまり、自分宛てに“i-code”として日本語で書いている。Kamilaの日本語の例を図1に示す。

Kamilaにとって日本語は自分の強い感情を表現する言語であり、気持ちがないと書けないのである。そのため、彼女は自分の気持ちを込めて、自分に向けて自分のために日本語で書いていると言える。自分の主観的な気持ちを日本語で表現するといった行為は、「自分的観点というか。なんか、客観視しすぎない感じで書くと日本語に寄る」と述べていたSuzanaにも見られた。インタビューの中で、これから「日本語で日記を書きたい」と述べていたことから、Kamilaにとって日本語は、自分の気持ちを素直に、また率直に表現する言語であり、第三者ではなく自分宛てに書く表現手段である。

V. 3 Lunaの例

Lunaは日系4世の大学生(20歳)である。日本には小学生の時に2年半住んだことがある。1週間に3,4回InstagramやFacebookなどのSNSを使って、スマートフォンでブラジル人の友人に日本語で書いている。例を図2に示す。



図2 -LunaによるInstagramでの投稿

Lunaはインフォーマルな日本語で短い文で書いている。日本語で書くのが好きな理由として以下のように述べている。

- (23) 「クールだからです。日本語で一番好きなのは書くこと(表記)です。練習するのが大好きです。」

また、自分だけに日本語で書いていることも報告している。

- (24) 「また、私は手書きもよくします。ネットでより手書きのほうが多いです。ただ、それは私にだけ書きます。日記です。とってもシンプルなもの、内容は「今日は疲れた一日だった」「明日はあれをしないといけないから緊張している」などです。」

日記を書いているのは、日本語を練習する機会が少ないと感じ、また、将来日記を読み直した時に、自分が何を間違えて書いていたのかわかるからよいとも述べている。Kamilaも自分のために自分に宛てた日記を書きたいと述べていたが、Lunaの場合、それとは少し異なり、「日本語を練習する機会」と実利的な面が全面に出されている。

また、日本語で書く時の困難点については、次のように述べている。

- (25) 「文法。日本語のテキストを見ると、私が使う構文ではないのを目にします。それが、(書き手が)日本人で、考え方が違うからなのか、それとも私が日本語の学生で、日本語の構文のことを考えているからなのか。。。例えば、日本人はよく連用形中止法を使いますね。私は使いません。一度も使ったことがありません。」

Lunaにとって日本語で書くことは、よい練習の機会で、書く時も文法が間違っていないかどうか意識して書いていることがわかる。この意識は、今まで見てきた他の調査参加者の意識とは異なる。彼らにとって日本語で書くということは、「無意識に」「自然に」書くことであるのに対し、Lunaにとっては「意識的に」「練習として」書くのである。

このように、日系ブラジル人といっても一つで括ることができないほど、その属性のみならず、日本語で「書く」ことやその意識や困難点に関して多様性があることがわかる。

VI. 考察

本研究の日系ブラジル人は、「書く」ことが「好き」「嫌い」の半々に分かれたが、嫌いな理由として、漢字が難しい、フォーマルな書き言葉がわからない、「話す」ことに比べて「書く」機会が少ないということが挙げられた。これは、「書く」必要性があると回答した調査協力者が少なかったことにも関連していると思われる。

また、「書く」ことが好きな理由としては、書かれた日本語がグラフィカルできれいである、ヨーロッパ系の言語と比べて省スペースでたくさんの情報が送れる、「書く」ことによって語彙を覚えることができ、言葉の理解が促進される、自然体にかけるのでとても楽であることが挙げられた。これらの回答から、日本語能力が日本語ノンネイティブに近い日系ブラジル人と日本語ネイティブに近い日系ブラジル人がいることがわかる。例えば、「書く」ことによって語彙を覚えることができ、言葉の理解が促進される」は、「日本語を練習する機会」と捉え、実利的な面が全面に出されていることから前者であることがわかる。IV. 3. 1 で見たとおり、視覚芸術としての「書く」ニーズがあることは、アルファベット圏である欧米言語との使い分けとして興味深い。

一方、「自然体にかけるのでとても楽である」は後者である。現に、後者に属する調査協力者は、日本での子供(小学生、中学生)の頃の学習・文化体験の記憶が何かのきつ

かけで触発された時(Suzana)や感情的になる(Kamila)と日本語で書きたくなると語っている。

ただし、本調査では日々日本語で書いている者は少なく、中でも日本語関係の仕事をしている人を除き“*They-code*”としての「書く」は見られなかった。公的な文書コミュニケーションはポルトガル語で行われるためだと考えられる。その一方で、友達同士との私的な交流、すなわち“*We-code*”として日本語を「書く」ことに興味を抱いていることがわかった。

また、今回非常に興味深い現象として、日記など自分に向けた“*I-code*”としての「書く」に興味がある、もしくはそのコードで書いていることも明らかとなった。これらの回答をしたのは日本で就学経験のある帰国生のKamilaとSuzanaとLunaであった。

- (26) 「自然体に書けるのでとても楽だからです。」(Suzana)
- (27) 「哲学なのでやっぱり、日本語を、無意識に日本語で書いちゃうんですね。哲学とかそういうなんか、自分的観点というか。なんか、客観視しすぎない感じで書くと日本語に寄ることが多いかなみたいな。」(Suzana)
- (28) 「自分的に思ったところとかをメモしたいなって思うコマとかは、やっぱり日本語寄りになっちゃうのかなあ、みたいな。」(Suzana)
- (29) 「日本語で日記が書きたい」(Kamila)
- (30) 「私は手書きもよくします。ネットでより手書きのほうが多いです。ただ、それは私にだけ書きます。日記です。」(Luna)

なぜ日記言語がポルトガル語ではなく日本語なのだろうか。一つ考えられるのは、日記のように「気持ちや体験を書いて記録する」という行為は非常に日本的なものであるという可能性である。キーン(2011)は、土佐日記等日本の日記文学80篇の分析から、日本人ほど日記が好きな民族はいないということを述べている。また、自分の1日の体験の振り返りを「書く」という行為が日本の小学校では毎日の宿題(または夏休み等長期休暇の宿題)として課されていることが多い。これらは日本語自体に内在化する属性というより、日本文化・習慣の一つであろう。

自分の内省や気持ちを言語化し、文字化するという習慣を維持・継承しているのは、JFLとしての日本語学習の「書く」(石毛2011, 2012, 2014)とは異なる日系ブラジル人のユニークさ、つまり、コミュニケーションのための言語習得ではなく、文化習慣の習得・継承としてことばを獲得している証左ではないだろうか。

VII. まとめ

本研究の日系ブラジル人の「書く」をめぐる言語行動は非常に幅広いことがわかった。日本語母語話者のそれに近い傾向を示す人もいれば、ノンネイティブに近い人もいた。例えば、母語話者に近い傾向を示した日系ブラジル人は、文法などの容認性判断力は高い(選択肢から選べる)が、適切な語彙や表現、言い回しを探すのにとまどい、敬語、結束性、論理性、接続詞が難しいという特性がある。一方、非母語話者に近い日系ブラジル人はゼロから外国語として日本語を学ぶ学習者の特性に似ている。概して、本研究では日本語を「書く」際の困難点としては「敬語や授受表現などを含む談話文法」(スピーチレベルシフト)、「漢字」、「慣用句」の順に難しさを感じる傾向が見られた。また、「書く」困難点に関する回答の傾向として、特に、漢字、慣用句、文法に関しての項目で、個人間において大きな差が見られた。このことから、日系ブラジル人と言っても、日本語で「書く」こと、その意識、困難点に関して多様性があることが伺える。

日本語で「書く」ことが好きな人と嫌いな人とでは、半々に分かれたが、「書く」ニーズを感じているのは調査協力者である18人中4人とどまった。

また、仕事で日本語を使用している調査協力者を除き、“They-code”としての「書く」は非常に少ない一方、友達同士との私的な交流など、“We-code”として日本語を使用したいといった願望があることが明らかとなった。また、本調査での興味深い現象として、感情的になる時や内省をする時に“I-code”として日本語で「書く」行動が帰国生に見られた。「書く」際に、第一言語であるポルトガル語が“We-code”である一方、日常的にはあまり使用されない言語(日本語)が“I-code”であるのは、気持ちを書き残すという行為が日本的なものであるということと、日本語を使用していた頃の自分に親近感を感じていることの表れであると言える。

このように、「日系ブラジル人」と言っても、ライティングに関する意識、ニーズ、困難点は多様であり、彼らを一つの属性に括れないものである。しかし、本研究の調査協力者である日系ブラジル人だけではなく、日本語使用者、学習者も全て同じような状況ではないだろうか。移動と往還の世紀となり、個人間の多様性は拡大傾向にある。各人の言語文化背景によって傾向を予測するということは今後ますます困難になるだろう。

参考文献

- 石毛順子「英語または韓国語を母語とする初級日本語学習者の作文過程－母語使用の観点から－」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』3 (2011)1-8.
- 石毛順子「英語を母語とする日本語学習者の作文過程－母語使用の観点から－」『留学生教育』17(2012)73-79.
- 石毛順子「英語・韓国語・中国語を母語とする初級日本語学習者の作文過程－母語使用の観点から－」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』6 (2014)75-83.
- 工藤真由美, 森幸一(編著)(2015)『日系移民社会における言語接触のダイナミズム－ブラジル・ボリビアの子供移民と沖縄系移民－』大阪大学出版会
- ドナルド・キーン(2011)『百代の過客 日記にみる日本人』講談社
- ESTADÃO (2018) “44% da população brasileira não lê e 30% nunca comprou um livro, aponta pesquisa Retratos da Leitura”. <https://cultura.estadao.com.br/blogs/babel/44-da-populacao-brasileira-nao-le-e-30-nunca-comprou-um-livro-aponta-pesquisa-retratos-da-leitura/> (参照2020-01-12)
- GUMPERZ, John J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge University Press.
- SAKAMOTO, M. (2006) Balancing L1 maintenance and L2 learning: Experiential narratives of Japanese immigrant families in Canada. In: K. Kondo-Brown (ed.). *Heritage language development: Focus on East Asian immigrants*. Amsterdam: John Benjamin Blackwell. pp. 33-56.

本内容は、

- [1] 国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「『具体的な状況設定』から出発する日本語ライティング教材の開発」(プロジェクトリーダー：小林ミナ)
- [2] 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究(15K12899, 研究代表者：小林ミナ)の研究成果の一部である。

i 分析には、R(バージョン3.5.0)を用いた。

Writing of Japanese Language User in a Plurilingual and Pluricultural Society:

The Case of Japanese Brazilians Living in Sao Paulo and Brasilia

MUKAI Yuki, MATSUDA Makiko

Abstract

In this study, writing in Japanese by Japanese Brazilians living in a Plurilingual and Pluricultural society will be considered. Specifically, the awareness, needs, and difficulties of writing will be examined. The participants of this study were 18 Japanese Brazilians with more than intermediate level of Japanese oral ability. Data collection consists of questionnaire surveys and interview and was conducted between November and December 2017. As a result, regarding the tendency of the difficulty of writing, there was a large difference between individuals, especially in items related to *kanji*, idioms and grammar. It turned out that there was little need for writing in Japanese, and writing as “They-code” (Gumpers 1982) other than those who work in Japanese language was not verified. Writing for a private interaction with friends, that is, as “We-code”, is not common between them, but it was revealed that the participants desire that code writing. Interestingly writing as “I-code” was verified in this study.